長谷川成一・村越　潔・小口雅史・斉藤利男・小岩信竹共著
『青森県の歴史』（新版県史シリーズ2）

福井　敏隆

本書は、五人の著者によって協同執筆された青森県の通史である。このシリーズの旧版は、一九七〇年宮崎道生氏によって著されたが、実に三十年ぶりの新版である。この間、河出書房新社の『図説青森県の歴史』（一九九一年刊）が出版されているが、図説として編集されたため、本県の通史としては不十分な面があった。そのため、本書の刊行には待望久しいものがある。多くの方々に読んでいただきたいと願うのは、筆者ばかりではないと思う。

それでは本書の構成と執筆者を見てみよう。

原　始	一章	青森県の黎明	村越　潔氏
古　代	二章	古代蝦夷の時代	小口　雅史氏
〃	三章	北の激動の時代―古代から中世へ	〃
中　世	四章	鎌倉・建武政権と「北の中世」	〃
〃	五章	躍動する北の世界	斉藤　利男氏
近　世	六章	近世北奥世界の開幕	長谷川成一氏
〃	七章	藩政の展開と北奥民衆の世界	〃
〃	八章	藩政の崩壊と北奥民衆	〃
近現代	九章	近代の青森県	小岩　信竹氏
〃	十章	現代社会の出発	〃

執筆者はいずれも、本県の考古学・歴史学研究の最先端で活躍されている方々であり、これ以上望み様のない執筆陣である。また、構成を一見してわかるのは、三章から八章まで「北」と「北奥」がキーワードになっていることである。一章の一・二節にも「北方」・「最北」という語句がついており、文字通り「北」を意識した内容となっている。この点を長谷川氏は序文「風土と歴史」において、本県の歴史を「北方世界との交流が育む歴史」として総括しており、従来の「未開」「辺境」「みちのく」といった暗い〝負の視点〟は見られない。

それでは、順次各章の内容を紹介し、気の付いた点を述べていくことにする。一章は本県の旧石器時代から弥生時代までを扱っている。ここでは、旧石器時代の大平山元Ⅰ遺跡の記述、縄文時代の固定観念を崩した三内丸山遺跡の記述、弥生時代の水田が発見された垂柳遺跡や砂沢遺跡の記述が興味深い。垂柳遺跡については焼米や籾痕のついた土器の存在が旧版の記述にみられ、この遺跡の研究が長い歴史を持っていることを感じさせる。近年は縄文時代というと三内丸山遺跡というイメージが強いが、亀ヶ岡遺跡の持つ重要性についての記述も見逃せない。また、三内丸山遺跡についての、縄文都市・人口・範囲についてのコラムは、辛口でありこの遺跡の実態がまだ確定はしないだろうということを予想させてくれる。

二章では律令政権の浸透と「エミシ」と呼ばれた人々の実態が明らかにされているが、日本で高まった中国風の中華思想が、差別意識をこめて東方の辺民を「蝦夷」と呼ぶようになった過程が詳述されている。斉明天皇時代の阿倍比羅夫の「北征」についての記述も詳しい。

三章では十世紀後半から十一世紀にかけての北の防御性集落である高屋敷館遺跡（浪岡町）の記述に注目をしなくてはならない。また、後三条天皇による政治改革の一つとして行われた北方政策、延久の合戦についても、同天皇の時代に古代から中世への時代の画期を求める要因の一つとしており、延久の荘園整理令と並んで重要であることを指摘している。高校で日本史を教えている筆者にとっては見逃せない問題を含んでいる記述である。なお、二・三章を通して気が付くのは、最近の考古学の発掘調査の成果が大幅に取り入れられていることである。コラムにある「夷」文字の謎もその一例であり、興味深い。

四章では安藤氏を中心に、得宗領と安藤氏に与えられた「東夷成敗」権、文永エゾ反乱と津軽大乱の関係、南北朝合一後の応永のエゾ反乱について記述をしている。但し、安藤氏の記述のみが多く、曽我氏や工藤氏といった他の鎌倉武士についての記述が極端に少ないのは通史としては問題があると思われる。

五章では安藤氏・南部氏・アイヌ民族を基軸に、北の世界の動乱と変貌を戦国期まで記述している。このなかでは、中世都市十三湊の繁栄が最近の発掘調査をもとに詳述されており、当時の十三湊が取り結んでいた「人ともの」のネットワークが、若狭小浜・越前敦賀などを介して、はるか西の中国・九州まで及んでいたことを具体的に紹介している。

なお、津軽為信の出自について、南部側の史料を重視し、久慈信義の弟平蔵為信が、津軽に行き大浦氏の養子となったという説を、津軽家当主の名乗りが二代信枚から五代信寿まで代々「平蔵」であったという事実を根拠に述べているのは注目に値する。

六章は豊臣秀吉の統一政権樹立と北奥の動き、つまり南部信直と津軽為信が近世大名として認知されていく過程を中心に、盛岡藩と弘前藩の成立が記述されている。コラムで江戸・大坂や京都などと異なる既婚女性が眉刷りをしない風習をあげているのは、民衆史の面から興味深いものと言えよう。

七章は藩政確立後の新田開発・鉱山開発と海運の発達や流通の実態を取り上げる一方、北奥の民衆の生業や生活についての記述も詳しい。特に、前者の部分では寛文蝦夷蜂起について、後者の部分では盛岡藩・弘前藩領内に住むアイヌの人々の動向について記述があり目配りがきいている。また、学問と文化の発達についての記述では、民俗学の成果が取り入れられており、ねぶた・法霊祭礼・えんぶり・虫送りなどについての記述がみられる。また、武士以外の庶民の旅や教養にも触れている点は、この分野の研究が進んで来ている現れであろう。しかし、弘前藩における蘭学の開始時期を、細川家から養子にはいった十二代承昭の提言に求め、幕末の町医佐々木元俊が稽古館で教授してから本格的になったとしているのは、いささか遅すぎるといえよう。寛政期にすでに江戸の芝蘭堂で蘭学を学んでいる在村医が存在するし、化政期には藩医の中に蘭学を学んでいる者がかなりおり、蘭学の浸透については時期を早める必要があると思われる。

八章は藩政改革、蝦夷地警備の負担、戊辰戦争、明治維新、と近代へつながる時期を記述している。この時期は藩政の建て直しを迫られた時期であったが、蝦夷地に出稼ぎに行くたくましい民衆の姿もみられた時期であり、田名部通一揆・民次郎一揆・稗三合一揆に代表される、立ち

上がる民衆の姿がみられた時期でもあった。また、安藤昌益に関する新史料がコラムで取り上げられており、享保期に昌益は京都で味岡三伯について儒医学を学んだことは間違いのないものと思われる。なお、二三九頁に史料写真「標符（弘前藩）」が掲載されているが、この史料を「標符」と断定してよいのかという疑問がわく。「標符」は通帳形式であるという説があり、この史料は米切手としたほうがよいのではないだろうか。それにしても、七・八章は従来記述されることの少なかった民衆の生活が具体的に記述されており、この方面の研究が着実に深まっていることを反映している。

九・十章の近現代は『青森県の百年』（山川出版社　一九八七年刊）があるためか、比較的簡略な記述になっている。九章は青森県の成立から、明治・大正から昭和二十年の太平洋戦争終戦までを扱っている。この中では大正二年の凶作についての記述が大正期を特徴付けるだけでなく、東北青森県の戦前を物語る一つの特徴であろう。ただ、昭和になって教育も戦時体制の中に組み込まれたという記述のなかに、中学校や高等学校の生徒が勤労奉仕や学徒動員に駆り出されたという記述はあっても、高等女学校の生徒が果たした役割についての記述がないのは片手落ちであると思う。

十章は戦後の青森県についての記述であるが、紙幅の都合か特に簡略である。ここで述べられている米の耐冷品種改良の歩みは、大正二年の凶作に対する青森県の克服状況を表しているといえよう。青森県の米の反収が全国首位になったのは昭和五十年代であるが、現在も常に上位にはいっており、りんご栽培が飛躍的に生産額を伸ばしたことと並んで、青森県農業の大きな特徴といえよう。しかし、巨大開発の進展では、むつ製鉄・原子力船むつ・フジ製糖の失敗に続くむつ小川原開発の現状が述べられているが、当初の計画とは違って核燃料サイクル施設の誘致が行われ、全国の注目を集めていることは周知の事実である。この事業がどのように推移するのか、歴史的にも注意深く見守っていく必要があると思う。

なお「あとがき」で、長谷川氏が「原稿の提出が遅滞気味だったことから時間的余裕がなく、執筆者相互の連絡や調整が十分におこなわれたとは言いがたかった。そのため各章間での齟齬や不統一が多少見られたことは残念であった。」と述べておられるが、確かに齟齬や不統一がみられた所もあったが、共同執筆の場合いたしかたがないであろう。

以上、簡単に本書の内容を紹介しつつ、批評めいたことを述べてきた。筆者は近世史を専攻とする者であり、全体に渡って十分な内容把握ができる力量はない。思い違いや理解が十分でない部分があったかもしれず、その点はご寛恕いただければ幸いである。

（山川出版社、B6版、三二四頁、本体一九〇〇円、二〇〇〇年二月刊）

（ふくい・としたか　青森県立弘前中央高等学校教諭）